１１月セミナーを１１月１８日(土)　１３：３０～１５：３０に開催しました。

会　場　　愛知文教大学　４０３教室

テーマ　「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けての第一歩を　～学びの作法と教材研究の体験を通して一緒に考えましょう～」

講　師　学び合う学び研究所フェロー　栗木　智美先生

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、学びのマナーの徹底と子どもと作り上げるマナーです。 教員になって、授業を受けることがないので実際に短歌について考えるのは改めて国語の楽しさを感じることができました。 子どもたちの感性だけにいきすぎないよう、本文に戻す。そこにある言葉に戻すという必要性を感じました。
今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、枠を作って型にはめたくなりがちですが、もっと子どもにまかせていいということです。 マナー、来年の授業開きで子どもに託しながらやってみよう！と思いました。こうなりたい、こうは嫌が４月に言えるようにここから意識的にやっていこうと思います。ありがとうございました！
今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、国語においてジャンプの課題は深めることと仰っていたのがとても印象的でした。他教科の先生方から伺う話で「ジャンプ」という言葉が自分の中で落とし込みきれておらず、授業を作る際に頭を抱えることが多かったのですが、本セミナー内の「深める」という表現がとてもしっくり来ました。少しだけ頭を抱える時間が少なくなりそうです。 私は講師１年目で、学び合いというものに触れたのも今年に入ってからだったので、暗中模索状態でした。勤務校の先生方から学び合いについて様々なご意見を頂いておりましたが、私の中でそれらの助言が実を結びきらない日々が続いていました。自分の中で整理がつかないままだったのが原因だと思います。その悩みが本セミナーでかなり解消されました。 先生方の有難い助言はきっと本日頂いた資料に詰まっているのではないか。自分の中で情報が言語化され、まとまっていくのを感じました。 また、教材研究についても、噛み砕いた表現でご説明して頂いたので、自分の中に落とし込むことが出来ました。まずは授業者である私自身が教材に価値を見出すこと。目の前にいる生徒を見ること。その生徒たちに対する手立てを考えること。とてもシンプルながら、中々気づくことが出来なかったので、本セミナーを通して教材研究を見直したいと感じました。次の単元でどうしていこうか、今からとても楽しみになりました。 深い学びのある、楽しく居心地のいい時間を過ごすことが出来ました。 本日は貴重なお話をありがとうございました。
今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、学びの作法は「マナー」であること。そしてそれは生徒同士の作法マナーであって、より良い関係性の中で学べるのだということがわかりました。共有したいマナーを生徒たち自身に作らせていらっしゃることに、目を見張りました。生徒たちになかなか主体性をもたせられないと悩んでいましたが、まずはスタートから違

っていたなと思いました。

国語はジャンプというより深める、文学教材では感じる(読み味わうと、言ってきましたけど)ことが大事だと改めて思いました。いろんな読みが出る中で、授業者自身が差異を正確に聞き取ること、また生徒たちにも言葉を大事にさせ、差異を漏らさず聞き取らせること、また共有させることなどを丁寧に行うこと、それには音読をもっともっと入れていかねばと思いました。…と同時に、言葉から想像する楽しさをもっと授業で一緒に味わえたら幸せだなあと思いました。

今日は自分も生徒になれたことが楽しく、そしてすごくわかりやすくまとめられた授業の様子も見せていただけたおかげで、生徒たちの考えの変遷を興味深く観察できました。また生徒たちへの言葉掛けも参考にでき、とても有意義な時間となりました。「梯子かけ」が、我が校では齋藤先生から出されている課題なので、学習材を研究するなかで、生徒の読み方を予測してもう少し考えるようにしていきたいと思いました。

今回は、一緒に参加された新任の方も喜んでいらっしゃったので、私のような年だけ取って、伸びもしない教員でもお役に立てたかなと、そのことも嬉しく感じることができる研修になりました。ありごとうございました。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、音読の効果です。

学びのマナーをクラスごとに作っている点が素晴らしいと思いました。マナーは統一すべきという固定概念が自分の中にあったことに気づかされました。また、音読を重ねることは、自分の読みと向き合うことだということも、ビデオの中の子どもたちが教えてくれました。生涯授業者であり続ける栗木先生、ありがとうございました。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、ありのままを受容し聴き合う人間関係です。

栗木先生ありがとうございました。栗木先生の秘密の技、内緒の芸をたくさん披露してくださいました。

何でも聴いてくださり、ありのままの自分を丸ごと受容してくださる、すてきな先生方に囲まれ、ゆっくりゆったり、肩の力を抜いてたくさん学び直し、幸せな時間を過ごしました。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、学びの作法を生徒たちが考え、自分たちのものにしていくことの大切さです。

子ども達が今年、意識したい学びの作法を年度はじめに創るというところが目から鱗でした。学びの主体は子どもであり、作法も子どもが主体的に身につけるものであると再確認しました。教材研究の方法も社会科と共通するものがあり、大変参考になりました。ずっと見てみたかった栗木先生の授業の一部を見られてとても充実した時間でした。有難う御座いました。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、学び合いでは、お互いを思いやるマナーの上で成り立つことです。

初めて参加しました。学び合いを体験することができ、いろいろ感じることができました。

ただ　知らない者からすると「わかっている」と言う感じで話し合いが進められると　取り残されていると感じる一面もありました。

もう少し時間があるとよかったです。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、学びの作法づくりは民主的に生徒も参加するということです。 学びの作法づくりが最も勉強になりました。来年度、実施できるよう、さっそく布石を打ちたいと思います。栗木先生の名前を聞き、参加しましたが、中川先生、文通先生…たくさんの素敵な先生とここで会ってお話ができたこともとても嬉しく思います。貴重な時間をありがとうございました。
今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、学びのマナーは、子どもたち自身でつくりあげることが最も大切なことだとあらためて感じました。 詩を何度も読ませることで、子どもたちが色々なことに気づいていき、共有しながら詩を味わっていけることがよくわかりました。また、自分の授業では何度も読ませたり、話し合わせたりするなど、こちらがさせてしまっている場面が多いような気がしたので、子どもたちが主体的に教材や仲間と対話できる授業を考えていきたいと思いました。
今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、教材研究の仕方です。 栗木先生ありがとうございました。国語の教員でもない私ですが、教材研究の仕方はとても参考になりました。素材と生徒と指導の３つをその時の生徒に合わせて組み立てること、これは指導案を作るときは、記述するので意識しますが、指導案を作らなくても意識することだと改めて思いました。その中に生徒が入ってくるからこそ、同じ単元でも授業の仕方は変わって当たり前だと思いました。どのような生徒を育てたいかを意識し、また、それをマナーという形で生徒と共有することで生徒とともに授業を作り上げることができると思いました。
今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、教師の果たすべき役割はなにか？ということです。 いつもながら、栗木先生の授業に対する熱意と工夫を感じるセミナーでした。今なお授業実践者として中学生と共に「学び合う学び」を追究し、楽しんでいるのがすごいと思います。 前回も今回も「一緒に考えましょう」と参加者目線で、自分の授業の手の内を惜しげもなく公開して（自己開示し)、その反応を見て学ぶ姿が「学びのインフルエンサー」の栗木先生らしいところだなと思っています。 学びの作法（マナー）についても、教師が押し付けるのでなく、「こうなりたい」を考えさせ、子どもと共有するプロセスを経て実効性のあるものにしています。一方で「これは嫌！」も出させていたのも、なるほどと思いました。「学び合う学び」におけるヒドゥン・カリキュラム（2021 後藤孝文セミナー）やヒドゥン・メッセージとよばれる教室の文化や秩序など効果的な伝え方になっていると思いました。また、与謝野晶子の短歌の授業記録の「外がただのコンクリートのところだったとしても、花野の夕月夜みたいな景色に感じられるのかな？」というＹの問いから「恋をしている気持ちで外へ出たら、どんな景色でもバラ色だよ」と言ったという生徒たちの感性は素晴らしい。栗木流の教材研究の発表もあり、授業づくりのヒント満載ゆえに、是非とも多くの現職の先生方に聞いて欲しいと思いました。
今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、学びの作法と教材研究体験というサブテーマのセミナーでした。 栗木先生は「学びの作法」をマナーと呼ばれていましたが、グループの中では「学びのルー

ル」という言葉が頻繁に使われていました。無意識のうちに身についていることが理想ですが、現実的にはどこかで子供たちと考えてみることも有効でしょう。しかし、これは「こうしなければいけない」という圧力と紙一重であることを、常に忘れないようにしたいと感じました。

教材研究定見では、与謝野晶子の短歌「なにとなく君に待たるるここちして出でし花野の夕月夜かな」が取り上げられました。「出でし」が夕月か作者か、あるいは両方を兼ねているのかを、個人的には考えましたし、授業でも考えてもらいたいと感じました。

グループ内では「君に待たるる」の「が」でなく「に」はなぜかという疑問も出されました。

これについては見せていただいた生徒のワークシートに、「君に待たるる」に「カッコいい！」と書かれていたのが、恐らくベストアンサーでしょう。同じ生徒が、次の「ここちして」に「心地が良いということ？」と書いており、中学生を単純に素晴らしいとかダメだとかではなく、成長過程ではあるが無意識の感性を持つ存在だと、改めて思いました。

我々がグループで出し合った見解が、授業ではほとんど生徒から出てきたことを授業記録で確認することができました。中学生恐るべしですね。いや、栗木智美恐るべしなのかな。